

いと思うのである。

バスが目的地に着いた。別れ際に彼女から「先生、いつかあの頃のみんなが集まっておしゃべりしませんか」と言われた時、教職の道を選んだことの充実感とともに、すっかり成長した教え子の姿から「光陰矢の如し」という言葉が頭をよぎった。

(小高町立小高小学校教諭)

## ライン引き

立石 ひとみ



「用具室の鍵を持ってきました。石灰で体操着を真っ白にした男子二人が、職員室に入ってきた。」

「くろうさま。六年生いつもがんばっているね。」と、先生方からあたたかい声がかかる。「今日もがんばっているなあ。」と、内心うれしく思う。

十月の半ばに、二日間にあわたり行われた校内体育記録会。二日目は、

下学年の記録会になっていた。

校庭のラインは、かすかに残ってはいるものの、走路がはつきりしない状態だった。そんな中で、下学年の先生一人が黙々とラインを引いていたのである。

教室へ行ってみると、子どもたちは、おしゃべりをしたり、読書をしたりしていて、窓の外の様子には全く気がつかないようである。

「おはよう。みんな、ちょっと校庭を見て。昨日は上学年の記録会だったから、みんな準備をしたけど、今日の準備は誰がするんだろうね。」しばらくの間、みんな沈黙していた。「一年生や二年生には無理だよな。」この言葉で、クラスの何人かは私が何を言いたいのか察しがついたようである。

「先生、ぼくたちラインを引いてきます。」と、T君が言うと、女子からも、「じゃ、みんなでやろうよ。」という声が上がった。

それから、みんなで校庭に出て二十分間。あつというまにラインを引くことができた。

仕事を終えた時、H君の「先生、いい記録が出つといいね。」と言った言葉がとてもうれしかった。ラインを引いてきなさい。」と指示したのでは聞けない言葉だと思った。

教科の学習は少し遅れてしまった

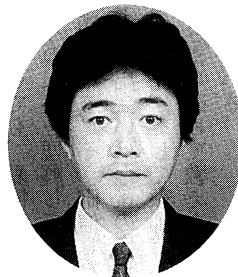
が、六年生として、下級生を思いやる心をもたせることができたのではないかと思う。

今までは、運動委員会の子どもたちが、教師に指示されて行ってきたライン引きだったが、この日をきっかけにして子どもたちは変わった。

業間体育のある日には、六年生としての自覚をもって、自主的に、クラスみんなでラインを引くようになって

## 可能性を信じて

大塚 文裕



「先生、もうやっちゃくねえ。」  
「そんなこといわねえで、もう一度やってみろ。」

初秋を迎えたある日のK君と私の宿泊訓練でのやりとりである。

K君は、私の学級の子供たちの中で、特に学習や体育に遅れがちな子供である。

宿泊訓練の準備や事前指導が順調に進んでいる中でも、私は心の中で「K君は、この二日間楽しく参加できるであろうか。」という不安を持ち続けていたことも事実である。

グループ活動、家庭を離れた宿泊

たのである。

ごくありふれた日常生活の中に、子どもたちに気づかせたり、考えさせたりして学ばせることがたくさんあること、また、その機会を逃がさずに、子ども一人一人の行動や心の動きを見守り、励ましを与えていくことの大切さを、あらためて考えさせられたことであった。

(郡山市立桃見台小学校教諭)

等不安に思われる要素は多分にある。中でも二日目に予定されているフィールドアスレチックは、彼の体面から考えてみると、最後までやり遂げられないのではないかと思われた。

幸いにも、一日目の活動はあまりハードなものではなく、K君にとっても、一つの活動をやり遂げたという充実感があり、いつになくすがすがしいK君の表情が印象的であった。

「これならば、明日のアスレチックも無事にやり遂げてくれるのではない